

# PHD LETTER

## 〈28〉

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1988・9

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会  
編集人：草 地 賢 一  
住 所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202  
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867  
郵便振替：神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会  
定 価：100円  
レイアウト：エフアンドエフ

- 草の根の人々を訪ねて…………… P 2
- フィリピン・ネパールフォローアップレポート…………… p 4



東マレーシアにて 撮影/高澤栄子

せっせとビーズを編んでいるお母さん  
背中でお昼寝していた坊やも  
やさしい指先を そおっとのぞいています。  
—ここは東マレーシアのサマ州  
コタンキナバルからバスにゆられて6時間と、  
あるロングハウスの一画です—  
このビーズの首飾りをつける人は誰でしょう…

# 草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

「止まれ！」目つきの鋭い数人の若者が私の乗った車を停めた。銃を構えて私の行き先、用作、所持品のチェックをする。酒くさい。時間は午前11時、場所は、フィリピン、ネグロス島バコロドから80Km南に降りた小さな村。

いわゆるヴィジランテ(反共武装自警団)と言われ村人から恐れられている私兵である。4月に続いて2度目のネグロス訪問。今回の目的は89年度の研修生選考のためである。カウナーパートの団体から推薦された3ヶ所の村を訪ねる旅の2日目、7月15日のことであった。

それぞれの村はほとんど最貧、そしてヴィジ



オリンガオ地区を警戒するヴィジランテ(反共武装自警団)

ランテによるパトロールを受け住民は恐怖におのっている。

5日間の村の訪問により、3人の候補者と面接した。その中から私はドミナードル君(25才)を選んだ。石ころの多いやせた土地にがちちと腰を据え村ではしっかり者で名の通った両親や5人の姉弟と農業に取り組んでいる好青年である。Small Farmers Association(小農民協会)の熱心なメンバーでその団体から自信を持って推薦された。日本人の希望は土壌改良を学びたいとのことである。彼の村を訪ねたあと海辺の小さな集落に泊めていただいた。プンタタラン、ここは農村よりもさらに貧しい。沿岸7Km以内は大型漁船は入れられないにもかかわらず、しばしば日本の船団に出くわすと言う。漁獲高の落ちた沿岸漁業は、極めて危険な潜水作業による貝の採取によってかろうじて継続されている。砂糖農園に見切りをつけた資本家が大规模なエビ養殖池を作るためにこの村に進出。何十年と浜に生きてきた零細漁民達は、今立ち退かされる不安におびえている。抵抗すれば共産主義者のレッテルをはられ、ヴィジランテの焼打ち、サルベージ(殺人)にある。Small Farmers Associationの若者と一緒

に漁に出た。石を腰につけて水深20mの泥にもぐり貝を拾う。細いビニール管を口にしたダイバー達は一時間も海底にいる。生活は食べるのか精一杯。

8月8日に神戸に帰ってみると彼らから長文の手紙が届いていた。引き続き連絡を取りたい。ともかく継続して村に来てほしい。自分たちの自立のために努力はすべて共産主義者と見なされ、いつも命の危険に見舞われる。外から継続して訪問することを彼らの安全に脅与することをあらためて思わされた。

7月18日マニラ空港で「PHD農業交流団」のメンバーと合流。北タイ・中央タイの農村を訪問。24日まで行動を共にした。行先は、ブリチャー、ウィラット、コマ君達のカレンの村、メンバーは兵庫県内の百姓、農協職員など9人。さすが農の専門家達、村でのカレンの農民との交流は具体的である。苗代、田植え、水利、共同組合、その他あらゆる分野の質問がとびかう。

ブリチャーは帰国3年目、ムシキヤ村では継



PHD農業交流団一色団長の説明をウィラットさんの説明で聞くムシキヤ村の村人達。88・7・タイ

続して農業の教師をしている。なかなか村の動きを作りきれないとのこと。他所者が受け入れられるのは時間がかかる。ゆつくりやっけて欲しい。ウィラットは昨秋の交通事故のケガの手術後肩に入れている、大きな金属のために力仕事は無理。完治まであと半年はかかるそうだが、定期的通院のため生活の根拠は、今チェンマイ市。土日だけは村へ帰っている。これも別の意味で時間がかかる。ベリヤは昨年と同様。昼はKBC(カレンバプテスト会議)のオフィスで働き夜は高等学校。何とか、看護学校を目指したいとのこと。前記3人とくらべ、コマは対照的である。帰国後、農薬の害を説き、協同組合の必要性を説き村人の関心を組織へと向けている。それは誠に嬉しいが、そのことによる反動を恐れる気持ちにはある。多数派のタイ人、役人となつたバンコクの商人が彼をおとし

入れることはたやすい。交流団のメンバーが、いみじくも別れ際に言った言葉。

「早死にするなよ。」



夜、村の人々を集まってもらい、村づくりに何が必要かを話した

7月25日夜、バンコクワランブーン駅を出た列車は、一路東北タイのコンケンを目指す。早朝5時過ぎに到着、そこからバスを回乗り難い、やつとワラヤの村カラン県カウオン郡ナク村ウォンピエン地区に着いたのが11時。3日間、村々を訪ねた年度の研修生の選考作業を行った。まづワラヤの家族や村の人と話し、改めて稲作、養豚、養鶏などの必要性を確認した。5人の候補者が推薦され6人の選考委員と深夜におよぶ話し合い、ようやく一人の青年に決めた28日バンコクに戻った。その後ビルマ訪問を終え、バンコクでの最終の調整を送り出し団体とした時、意外な報告を受けた。選考をキャンセルしたいと。5人の候補者の内3人が農民協会有得でない、PHDが継続して村人を招く意図が、今回の訪問でようやくわかった。だからもっと良い選考をしたい。協議の結果そのキャンセルに同意し、改めて村を再訪することにした。この事件はPHDが村人の理解を得るまでに時間がかかることを教えてくれた。一昨年からこのつきあい、しかもすでにワラヤという研修生を迎えているにもかかわらず、村人はこの心持が気がまぐれに招待してくれるくらいの認識だったようだ。村の中にPHDの理解が根付いていくために今後もこのような試行錯誤が続くであろう。

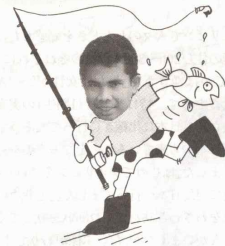
一週間の短いビルマ滞在で、様々な局面に出会った。農民の苦しみ、都市の人々の不安、流動的な事態の中でこの国が確実に新しい局面を迎えていることを体感した。非常に長く続いた一人の支配者による政治、経済の流れが混乱の極に達していることは明らかであった。帰国後連日のように報道される流血の惨事が個人事でない思いである。何よりも早く事態の沈静化と人々の生活の再建を望む。詳しく読者に自分の見聞を報告できないことを乞承いただきお話し願いたい。

# 6期生研修レポート

各地で研修を続ける6期生ですが、日本での生活にもすっかりなじみ、三人三様の個性を発揮して頑張っています。

## アフナルさん/インドネシア

5月30日から6月30日まで1か月、兵庫県香住町に香住高校水産科を中心に漁業実習を行いました。タコボイ、イカ釣り、定置網、巻き網などを高校生たちと共に学びました。自分の弟たちのような生徒たちとも仲良くなり、また先生方の熱心な指導にすっかり感激したアフナルさん、香住での一番の収穫は、と尋ねると「暖かい心の中に解れたこと」と即座に答えてくれました。7月1日、城崎町のPHD会員鳥居晋一郎さんの紹介で城崎中学交流会をもち、7月4日からは静岡県西伊豆町田子の遠洋漁業組合で、山本佐一郎専務のもと、一本釣りの漁法を学びました。伊豆では、約1か月の期間の中で、何回か長期の航海に出かけますが、さすが本物の海の男だからと、船上での動きも堂に入っていました。一見とつきにくく見える彼ですが、その実でもホットで、冗談好きの青年です。最近難しい日本語も覚え、話した人を驚かせています。あと半年間、彼の日本での研修という航海は続きますが、今度はどんな収穫を得られるでしょうか。



## アジャンタさん/スリランカ

ハードな研修スケジュールのときに疲れた顔も見せず、元気に農家の実習を進めています。6月中旬からは兵庫県馬場地区で研修を行いました。但

馬農兼高校の曾一先生のアレンジのもと、豊岡市、八木貞夫さん宅では養豚、日高町、尾藤光さん宅ではたばこの栽培、養父町、早田勝彦さん宅では牛の繁殖、豊岡市、安達一博さん宅では野菜の栽培を学びました。日本語も見違えるほど上達したアジャンタさん、夜遅くまで農家の人に質問したり、メモをとったりと大変熱心に学びを行いました。また、研修の合間には地元元若い人たちのボリリング大会にも参加しました。初めに農業指導をされた安達さん、「こんな子なら来てほしい」と喜んで下さいました。7月5日からは丹波地区に入り、12日まで丹南町、渡辺省悟さん宅で、19日までは春日町、中野宗嗣さん宅で、27日までは篠山町、東門隆夫さん宅で実習しました。有機農業の実践者渡辺さんの話に大変感銘を受けたようで、今、アジャンタさんは自分の出身地ボヤワラナ村にとって何が一番大切なのか、真剣に考えています。



ろう村塾、27日まで黒田庄町、三谷康さんの家庭にお世話になり、養豚、野菜、牛の肥育等を研修しました。来日当初は緊張のせいかな、人見知りする面が見られた彼女ですが、最近よく笑い、茶目も気もたっぶり、だいいびりラックスしてきた様子。ただ、稲作中心のタイの農家と異なり、「日本の農家はとても忙しいですね。」と驚いていました。アジャンタさん、ワラヤさん兩名は7月27日～31日の、たんば農文塾にて「草の根生活塾」に参加。今までの研修で学んだこと感じたこと、これからの課題について話し合いました。8月5日～21日までは、韓国の農村へ比較研修の旅に出ました。前半の研修の成果を生かし、後半はさらに具体的な研修に入る予定です。



## ワラヤさん/タイ

6月上旬、少し体調を崩して静養していましたが、すっかり回復し、研修に復帰して元気に頑張っています。5月にお世話になった兵庫県淡波町、田中吾東さん宅を皮切りに、6月27日から7月2日まで城崎町、広岡史朗さん、7月7日から13日まで八千代町、青位真一郎さん、17日まで市川町、牛尾武博さん、21日まで小野市、ふえ



インドネシアからの新しい研修生ベディさん、ファイジさんは8月2日來日、神戸YMCAにて日本語を研修中です。お世話下さったすべての方々、どうもありがとうございました。そして、今後ともよろしくお願います。

	8	9	10	11	12	89年/1
研修生スケジュール	ワラヤ(タイ)			兵庫県(稲作・養豚・婦人活動)		西日本研修旅行(平和と健康リーダーシップ学習)
	アジャンタ(スリランカ)	韓国比較研修		兵庫県(稲作・野菜・機械)		組合学習
	アフナル(インドネシア)	静岡県西伊豆町		和歌山県		養殖・加工など
	ベディ(インドネシア)	日本語研修(神戸市)		和歌山県		養殖・加工など
	ファイジ(インドネシア)	日本語研修(神戸市)		和歌山県		養殖・加工など

# 延べ参加者106人、盛り上がった第4回草生塾

7月27日、17人の子供達とタイ・スリランカの研修生、篠山町青年団仲間づくりの皆さん、篠山町中央公民館の方々に我々PHDスタッフにより、今年も兵庫県篠山町、丹南町で「草の根生活塾」が4日5日で行われた。合宿地は「たんば農文塾」、ここの生活は、炊事、風呂炊き、掃除と班に別れて分担。途中1泊2日の農家滞在には自作のおにぎりを持って5軒の農家にお世話になった。1日半の草刈り、収穫、牛豚糞の世話などの体験が子供にとってとても有意義であったこと

が報告会の発表からも伺えた。またアジアの研修生とのふれあい、アジアの料理を食べ、共に歌った。最後の夜は地元川小の子供も加わり、アジアの勉強し青年団の方の入った演劇のキャンブファイヤーを楽しんだ。子供にとって今度の体験を普段の生活と結びつけて考えることはすぐには難しいかもしれない。しかし、人間の基本的な生活を考えたり、毎日の生活を振り返るのにきつと役立つに違いない。

リーダー/逸見広心(神戸大農学部3回生)

# フォローアップツアーレポート

5月中旬から下旬にかけて、第1期～3期の研修生11名のフォローアップを実施しました。今回は特にネパールからの2期生、ラダ・バンストーラさん(82～83年滞日)の編織、洋裁の技術指導のため二人の女性指導者をネパール・ポカラに同時派遣し成果をあげてきました。3月の読者アンケートでもご希望の多かった帰国研修生の活躍ぶり、苦闘ぶりを今回フォローに当たった藤野主事のレポートでお届けします。 —編集部—

ともかく予定をしていたネパール、フィリピンの研修生全員に会うことができ、それぞれ元気な様子にまず安心しました。PHDの研修生の場合、全員の帰国後の存在、活動がつかめていることが嬉しいのですが、村から1週間かかるサンバさん(2期生ネパール)もカトマンズまで出てきて迎えてくれました。何といても今回のフォーロの中心はボカラのラダさんのところに若佐、吉田両先生の派遣したことになりました。雨期に入りかけの暑い中の2週間の指導でしたが、先生方も楽しく、またラダさんをはじめとする地域の女性たちに喜んでもらえ、お忙しい中行っていただいただけのことはあったと思います。またいわゆる技術指導然とした堅苦しいものでなく、先生方には失礼かもしれませんが、日本とネパールのおぼちゃん同士の、編織と洋裁をしながらの「寄り合い」というような雰囲気がとても自然な感じでした。このフォローについては先生方のレポートをご覧下さい。私は先生方と別行動でネパールの他の研修生のところを巡りました。その中でぜひ紹介しておきたいのがビスタさん(1期生)の働きです。彼の活動地域はカトマンズから車で半日、そしてそこからさらに徒歩で半日のところにあるパワニパティというところです。カトマンズでもたれた研修生が揃ってのミーティングの翌日、私は彼とともにその村に入りましたが、丁度この時に近くの



写真は歩いて半日、材料を運ぶ村人○水道建設工事を村人総出で実施する○村に待望の水が来て喜ぶ村の女の人たち。

集落マジガオンに水道を引く村人総出の作業がありました。車が入れることのできたところまでトラックでセメントとビニールパイプを選びこみ、ここからは村人が半日かけて来た道をセメント袋をかきつけて戻ります。村の奥の谷間にある湧き水の水源地からパイプを村までひき、必要なところをセメントで固定するのが今回の計画です。出来たところから徒歩で半日のところにあるパワニパティというところです。カトマンズでもたれた研修生が揃ってのミーティングの翌日、私は彼とともにその村に入りましたが、丁度この時に近くの

その後先生方一足早くネパールを出てフィリピンにまわりました。時折来る研修生からの手紙や新聞報道などである程度は経済的なしんどさがある人々に及んでいるだろうと思っていましたが、予想以上に研修生たちは苦勞していました。ほぼ同じところに4人が居ますが、帰国する時に描いていた仕事なり、村での活動に思い通りくわいていない人も少なくありません。研修生に限ったことではなくその地域全体が、そんな状態なのです。ともかく今食べていることにきゅうりううしています。今はまだフィリピンには根拠強くある、家族・親

戚間の相互扶助の形で何とかやりくりしていますが、あまりのゆとりがないにせよ、日本での経験を直接的な手段として生活向上にむけるところまでいかないのだからと感じました。こんなことをいうと、「役に立たないのなら、何のための日本での一年だったのだ」という意見がきこえてきそうですが、PHDがやっている、人材を育て、そして村の生活向上に貢献してもらうというやり方が、すぐに良い結果をもたらすのではないことを理解していただきたいと思うのです。将来を期待さこそすれ、今は特に権力も財力もない草の根の人である研修生の働きに性急な成果を望むのは酷でしょう。試行錯誤をくり返し、落ち込みを乗り越えながら5年10年いやさらに長い期間の中で、ひとつずつ実を結んでいくものじゃないかと思えます。単に技術の研修の度合を評価するのではなく日本に一年滞在したことによってできた良い人間関係、いかにそれと関係によって知り合えたアジアの友人たちを息長く激励し続けていくことによって、苦しい中での彼らのやる気を継続させていくことが大事だと思います。事実ウィリー君(2期生)「今は日本でお世話になった皆さんの期待にそう活動ができてくなくてごめんない。でももう少し時間を下さい」と私に語りました。このことはフィリピンの研修生に限ったことではありません。

またフィリピンで人々のしんどさを痛感したのは研修生達の住む200～300人集村のそれぞれに、いわゆる「じゃばゆきさん」婦人の女性が2～3人は最低のことです。特にト君(1期生)の実家の隣家の娘さんとも日本に出稼ぎに行っていたそうですが、私が日本から来ていることを知ると姿を見せなくなりました。はじめてフィリピンを訪れた6年前には逆に「私、日本へ行ってました。」と我々の泊まった家をわざわざ訪ねてくれ涙歌を歌ってくれたお嬢さんがいたのですが、だいぶ様変わりです。来日する数が増えるに従って、仕事の内容も好ましくないものが増えていっているでしょう。村の人もうすうすうどんな仕事なのか感づきはじめているようでした。

周囲にそんな様線があるにもかかわらず、日本に嫁ぎに行く娘さんが増えるのは根本にフィリピン国内での就職口がなく、また日本での給料が高いという理由があるからなのでしょう。もちろん女性だけでなく男性も就職難です。実際ト君の弟も専門学校を卒業しながら3年間職がなく、村へ帰って居候です。男性は多くの場合単純労働で入国できない日本を避けて中東東方面へ出稼ぎを希望しています。専足の2週間でしたが、2つの国の研修生の現場をまわってみて、絶対的な尺度でみればネパールの村の方がフィリピンより貧しいわけですが、ある程度の貨幣経済を確立し、現金がなければ成り立たない生活に入っているフィリピンの人々の相対的窮乏感が印象に強く残りました。それぞれの研修生については別にまとめます。

## 直弟子と孫弟子に囲まれての2週間

若佐康子 ラダさんの日本での滞在家庭の姫路の奥様。近所の方に洋裁を教えておられる。



山をモチーフにデザインを考える左ラダさん右吉田さん、中央では若佐さんが洋裁を指導中。

ラダさんは昨秋、重い病気にかかり予後を心配していましたが、元気に姿に安くなりました。彼女のところには編織や手編を習いに7～8人(18～27才)が来ます。子連れで6～7kmの道を歩いてくる人もいます。これ迄に教え子の幾人かは、自宅で仕事ができるようになりました。ラダさんのセーターは日本での研修時(58年)前回のネパール訪問時(60年12月)今回(63年5月)と見る度に形制的によくなっていますが、よりよいセーターを作るために、吉田先生がいろいろなサイズの型紙の計算方法を教えて下さいました。またネパールしさを出すためのデザイン研究(例えば、マチャブチアンボカラから見える山、ネパール文字)もされました。これから彼女か

## ネパール

**バラト・ビスタさん**(1期・82～83年滞日)  
西ネパールのダイレクに住み、結核の検査指任を中心とする保健活動と農業指導を行っています。生活費には十分でないため奥さんが小さな雑貨屋をやっています。ダイレクからさらに一日歩いた村にもグループをつくり、健康づくりの奉仕をしています。



カトマンズのミーティングに集った左ビスタさん、右サンバさん

前述のように山村で団体職員として、農業改良、保健衛生の仕事に力を入れています。村を巡るのには月に2～3回だけ。一帯の月にはカトマンズの学校へやってくるため給料の半分がとんでいくと嘆いてました。よい教育の機会をと思うと、日本にも増してネパールではとても高くつきます。

**ラダ・バンストーラさん**(2期 83～84年滞日)  
別荘にもある通り自宅の一室を開放し、15名程を常時集めて、編織、裁縫を指導、時おり山村へも出張しています。昨年秋、肝臓を病んでダウンしましたが、ほぼ全快。



日本のホストファミリーの日本写真を見る左サビさん右ニールンさん

**スリジャナ・サヒさん**(2期・83～84年滞日)  
平日は土木関係の会社勤め。休日にマザーズクラブで奉仕活動。セーター、バッグ等の製作が中心です。

**ニールン・ガウチャンさん**(3期・84年～85年滞日)  
ジャナヤにある家を人に貸し、いまはカトマンズにある学校で経済を学んでいます。日本での経験をより効果的に生かすためにもう一度勉強が必要と判断したようです。その後、じっくり考えた後の活動にご期待とつたところ。

**ヒレンドラ・アマティアさん**(1期・82～83年滞日)  
これまで通り食品会社に勤めるかわり、自宅で養鶏にとりこんでいます。日本から持ち帰ったブドウ、ミカンが実がなるようになりました。鶏は原因不明の病死が出て、また村の人に対して指導する自信まで至っています。昨年結婚し、奥さんは妊娠3カ月。養鶏を学んだ他の研修生との協議を助言、また日本の指導者の手紙による助言も約束。



自宅内にある鶏部屋で探明するアマティアさん



卵のおカズを収穫するアディカリさん

**ビシュヌ・アディカリさん**(2期・83年～84年滞日)  
以前とは担当地域が広がっていましたが家族計画教会で働き、村を巡っての家畜の指導、健康指導を行っています。現在の仕事の中に養鶏がないのが物足りないようで、村の人を巻き込んで自発的にやってみればハッピーをかけてきました。4人の子供と奥さんと暮らしています。

## 心の通う時間の使い方

吉田淑子 第3期生の編織指導をされた。西宮市で編織学校を開いておられる。

雄大なヒマラヤ山脈に寄り添うが如く、自然に恵まれて暮らすネパールの人々の素朴な生活は私の日常生活とは余りにかけ離れていて、はじめはや戸惑っていました。しかしラダさんや孫について編織を学ぶあいだにも他の生徒に對していつも気を配り、時折訪ねてくる近所の主婦があれは陽気な主婦になって相手をしたり、時間をゆつり使う様子は、心の豊かさや穏やかさを私に教えてくれた。ラダさんには美しい二人のお嬢さんと二人の息子さんがいる。その子供たちに毅然とした母親の態度で接したり、やさしい母親の姿を見たりする。さらにそんなラダさんが編織の技法や計算をひとつひとつクリアするたびに、まるで自分ができたかのように嬉しそうに笑顔を見る彼女の母さんかいる。私とラダさんの会話のやりとりは分からなくても、側でじっと見ているだけでその様子を察する母親の姿が本当の母の姿ではないかと思った。ネパールを殆ど知らずに出かけた私に戸惑いの中で見つけたものは、子を思う母の心はこれでも同じということだった。路上を歩く牛や豚からも同じことを思い、私はネパールに暖かなものを感じた。





### /編/集/後/記/

今号の特集で取り上げたように、PHDの活動はアジア諸国から研修生を招くだけでなく、日本人の生き様を再度見つめようと、「寄り合い」、「高校生の学習会」「草の根生活塾」を始め、全国各地で研修生との交流会が開かれています。

一般的にこうした会は、学習の場だけと受けとめられがちですが、学習だけでなく「人と人との出会い」の場でもあります。例えば「寄り合い」では、参加者の職業は学生、サラリーマン、教師etc.とバラエティに富んでいます。それぞれの立場に立った意見、感想が出ておもしろいですが、圧巻は2次会でのよもやま話です。一方では開発是非論が論じられているかと思えば、片やファッ

ションの話やアジアを旅した時に食べた食事の話が展開され、知らない人が聞けば、これがひとつのグループ?と驚くぐらいです。是非一度参加してみてもいいかがですか。(T.K)

レター〈28号〉編集メンバー

赤松恵美子 坪 光子 得原輝美 柿原登志夫  
梶原靖子 川那辺裕子 芝 美代子

(五十音順)

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため掲載しておりません。